


	学部長	学 長
閱 覧		

国 外 派 遣 研 究 員 報 告 書

令和6年9月24日

國學院大學学長 殿

所属・職名 経済学部 教授

氏 名 木村 秀史 

令和5年度 国外派遣研究員として実施しました研究について、下記のとおり報告いたします。

記

1 派遣期間 (期間延長のある場合は含めて下さい)

令和 5年 10月 1日 から 令和 6年 9月 30日 まで

実際の出国日 5年 10月 1日 同帰国日 6年 9月 15日

2 受入先研究機関など

King's College London

The department of International Development within the Faculty of Social

Science & Public Policy (as Visiting Professor)

3 研究目的

発展途上国における対外債務の構造的特徴について国際通貨ヒエラルキーの概念から

明らかにすることを研究目的とした。通常、対外債務を考える場合、対 GDP 比など

数字的な大小が問題にされる場合が多い。しかしながら、これら債務を負う場合、

どの通貨で債務を負うかによって、その構造は大きく異なるを考える。各国通貨には

ドルを頂点としたヒエラルキー構造が存在しており、そのヒエラルキーが対外債務に

どのような特徴を与えているのかを明らかにするのが本研究の目的である。

4 派遣中の研究概要

3の問題意識に基づいて、派遣中に研究を進めることができた。具体的な成果としては木村秀史「国際通貨ヒエラルキーの概念からみる途上国・新興国の対外債務の非対称性」『立命館経済学』第72巻第4号、2024年3月、にて発表した。

派遣中の本研究においては、主にポストケインジアンやマルクス経済学などの異端派経済学の文献を丹念に調査した。彼らの国際通貨に関する概念は、ある種の階層性があるという点で共通しており、その階層性によって各国の国内経済に様々な影響を及ぼしているとしている。そして、発展途上国のような国々の通貨はヒエラルキーの下位のポジションに位置づけられ、その従属的なポジションから様々な非対称的な不利益を被っているとしている。この概念は途上国や新興国の対外債務を分析する上でも重要であると考え、各国の対外債務に非対称的な構造が存在していることを明らかにしたのが本研究である。

本研究を行うにあたって、ホストプロフェッサーである Alfredo Saad-Filho 教授をはじめ、所属した2つの研究グループにおいて、様々な示唆を得ることができた。

1つの研究グループは「Global Production, Labor and Finance Research Group」でポストケインジアンで金融化を専門とする、Ewa Karwowski 博士がオーガナイズしている。グループには金融化を研究テーマにしている博士課程の院生が多数在籍している。2つ目の研究グループは「Global Capitalism, Power & Uneven

Development Research Group」で、ポリティカルエコノミーの視点からグローバル資本主義を批判的に捉えている、Sean Kenji Starrs 博士がオーガナイズしている。

本研究グループには様々な問題意識をもった大学院生が所属しているが、半導体産業のグローバルサプライチェーンに関心を持つ研究者が多かった印象である。この2つの研究会に参加することで、金融化やグローバル資本主義に関する最先端の問題意識に触れることができ、本研究において多くの示唆を得ることができた。また、院生を含めた研究者たちの交流によって、研究に対する意識を大いに刺激されたこともまた事実である。

とりわけ、金融化に関するグループでは、金融化をテーマにする論文について議論するイベントが何回も行われ、濃密なディスカッションを経験することが

4 派遣中の研究概要（続）

できた。金融化については本研究にも大いに関係するところであり、大変、参考になった。国内経済が金融化しているという事実は、国際金融市場への従属的な統合によるものと考えられるが、対外債務の蓄積も金融化の一側面と考えているからである。新自由主義政策に基づく国際金融市場との従属的な統合こそが対外債務の形成を容易にし、逆に国内の金融化が国内経済主体の金融指向的な行動に結びつき、対外債務の形成を促してきた側面があるからである。金融化に関する研究会への参加は様々な金融化研究に触れる機会となり、自らの問題意識を整理するきっかけとなった。

こうした有意義な研究グループへの参加によって、自らの研究を進めることができたと言っても過言ではない。国通貨ヒエラルキーの概念を用いて、途上国や新興国の対外債務がどう脆弱なのかを整理して考えることができたためである。

本研究では、途上国・新興国が国際通貨ヒエラルキーの下位のポジションであることで、対外債務の非対称性という不利益を被っていると主張しているが、主に次の2つの点に着目している。1つは対外債務の蓄積による資本逃避のリスクの違いである。外貨建て対外債務と自国通貨建て対外債務の資本逃避リスクの違いだけでなく、たとえ自国通貨建て対外債務であっても通貨ヒエラルキーが低ければ低いほど、資本逃避のリスクが大きいことを明らかにしている点は本研究における大きな成果であると考えている。

2つ目は、マクロ経済政策の制約と硬直性である。低ヒエラルキー通貨国は対外債務の蓄積によって、マクロ経済政策、とりわけ金融政策の硬直性を受け入れざるを得ないことを明らかにしている。通貨ヒエラルキーが低ければ低いほど、為替レートの安定のための高金利の維持を余儀なくされ、そのことが国内の産業発展を阻んでいる。不均等発展に結びついている点で非対称的であると考えられる。

こういったことは、国際資本移動の自由化が前提となっているため、途上国ではこれらを規制することが重要であるとの結論に至っている。新自由主義の論理に巻き込まれた形で進められてきた国際金融市場への統合は、彼らにとって必ずしも良いものではなく、むしろ非対称的な不利益を被っているのである。

5 その他の活動

その他の活動として大変有意義だったのは、大学院生との交流である。直接、教育に関わることはなかったが、大学院生から依頼される形で日本の半導体産業などについて、ディスカッションする機会があった。世界中から集まってきている優秀な院生諸君と英語でやりとりすることは大変、勉強になっただけではなく、研究と教育の両面において大きな刺激となった。

6 今後の研究計画

派遣研究中に本論文をさらにブラッシュアップした上で、英語論文として国際ジャーナルにアプライする予定だったが、時間的な余裕がなく間に合わなかった。今後の計画としては、まずはこの点を進めていきたいと考えている。その際に、Alfredo Saad-Filho 教授をはじめとする King's College の研究者達からアドバイスを得たいと考えている。

7 感想・所感

今回の派遣研究は大変有意義なものであった。とりわけ、ホストプロフェッサーである Alfredo Saad-Filho 教授が紹介してくれた2つの研究グループへの所属は院生を含めた様々な研究者との交流を持つことができた点で大変有意義であった。

おそらく、Alfredo 自身もサバティカルであり、世界中を飛び回ることから、私に対して十分に時間が取れない可能性があるために考えてくれたものなのだと思う。

残念なことに上記の理由から、Alfredo に会う機会は少なかつたと言わざるをえない。

しかしながら、研究グループでの充実した活動は、全体としてみれば、自分の研究への大きな刺激になり、国際的な交流や人脈作りにも大いに貢献したと考えている。

今後、これら研究者達と何かしらの関りを持ちながら、場合によっては共同研究なども含めて、自身の研究を進めていきたいと考えている。